

攝取心光常照護

一月八日、十区公民館長さんから電話があり、「今月は寺報慧光が配布物にないが」とお尋ねがありました。また、一月十五日には十一区公民館長さんから「寺報が配布物にないが、住職は体調が悪いとじゃるか」とお尋ねがあった旨お聞かせいただきました。

実は一月四日に右目、一月十二日に左目の白内障手術を熊本市内の眼科で受けて、パソコン作業ができなかったために一月号の寺報発行をやめました。

というわけで一月号の寺報がお手元に届かず、「?」と思われた皆さまにはお詫び申し上げます。

術後、仏事のご縁でお会いした方々から「メガネは」と尋ねられるのですが、近視のメガネは不要になりました。老眼用のメガネは必要になりましたが、近視のメガネから

解放された喜びの方が大きく快適な日々を今は送っています。

白内障の症状についても質問をいただきます。私の場合は車を運転しているとき、対向車に乗っている人が識別できない、サッシ開放の夏本堂でおつとめの後お取次ぎをする際に体育館白壁に日光が反射するとお参りしている方の顔の識別ができないなどが症状としてありました。

手術を終えると目に眼帯をされます。翌日、その眼帯が取れた時、病院内がこんなに明るかったのかと驚きを感じました。そして、これから明るい光の下で生活できるというしさを覚えました。思えば、ここ四・五年は気付かないうちにうすぼんやりとした視界で生活していたのかもしれないそんな体験をして頭に浮か

んだのは「正信偈」
 攝取心光常照護
 已能雖破無明闇
 貪愛瞋憎之雲霧
 常覆真実信心天
 譬如日光覆雲霧
 雲霧之下明無闇

の六句でした。現代語では阿弥陀仏の光明はいつも衆生を攝取取ってお護りくださる。すでに無明の闇ははれても、

貪りや怒りの雲や霧は、いつもまことの信心の空をおおっている。しかし、たとえば日光が雲や霧にさえぎられても、その下は明るくて闇がないのと同じである。

思えば、白内障の手術を受ける前までは、雲や霧で太陽の光がさえぎられて生じるうすぼんやりとした状態の生活を送っていたのかもしれない。術後は、うすぼんやりとした状態から脱して生活できるようになりました。では念仏者としての生活は

どうでしょう。
 三毒の煩惱(貪り・怒り・愚かさ)の雲や霧は、攝取の心光をさえぎるかのようにならぬように、私のお念仏の日々を覆いますが、その日々は決して明るさの無い闇ではありません。

唯円坊が『歎異抄』第一条に「悪をもおそるべからず、弥陀の本願をさまたぐるほどの悪なきゆゑに」と述べられているように、無明の闇を破る阿弥陀さまの光明をさまたげるほどの悪は無いのです。娑婆の縁つきるまで手術というものには縁がないと思っ

ていましたが、思いもかけず、白内障の手術をうけました。その縁から阿弥陀さまはいつも煩惱から離れることのできないこの身を救いの目当てとして、先手のお救いをしてくださっていることに気付かせていただいた有り難い縁でした。
 最後に
 今年も寺報を
 よろしくお願ひします
 と書かせていただきます。

法語の世界

《原文》

おなじく夢にはく、大永六、正月五日夜、夢に前々住上人仰せられ候ふ。一大事にて候ふ。今の時分がよき時に候ふ。ここをとりはづしては一大事と仰せられ候ふ。畏まりたりと御うけ御申し候へば、ただその畏まりたるといふにはなく候ふまじく候ふ。ただ一大事にて候ふよし仰せられ候ひしと云々。

つぎの夜、夢にはく、蓮誓仰せ候ふ。吉崎にて「前々住上人に当流の肝要のことを習ひまうし候ふ。一流の衣用なき聖教やなんどをひろくみて、御流をひがさまにとりなし候ふこと候ふ。幸ひに肝要を抜き候ふ聖教候ふ。これが一流の秘極なりと、吉崎にて前々住上人に習ひまうし候ふと、蓮誓仰せられ候ひしと云々。

わたくしにはく、夢等をするすこと、前々住上人世を去りたまへば、いまは一言をも大切に存じ候へば、かやうに夢に入りて仰せ候ふこと(の金言なること)、まことの仰せとも存するまま、これをするすものなり。まことにこれは夢想とも申すべきことどもにて候ふ。総て、夢は妄想なり、さりながら、権者のうへには瑞夢とてあることなり。なほもつてかやうの金言のことばはするすべしと云々。

《現代語訳》

これも蓮悟さまの夢の記録です。大永六年一月五日の夜の夢である。蓮如上人が、「このたびの浄土往生のことはもともと大切である。み教えにあうことのできる今こそがよい機会である。このときを逃すと、大変である」と仰せになった。そこで、「承知しました」とお答えしたところ、上人は、「ただ承知しましたといっているだけでは成しとげられない。このたびの浄土往生は本当に大切なのである」と仰せになったのである。

次の夜の夢である。兄、蓮誓が、「わたしは吉崎で蓮如上人より浄土真宗のなめを習ひ受けた。浄土真宗で用いない書物などをひろく読んで、み教えを間違つて受けとめることがあるが、幸いに、ここにみ教えのなめを抜き出したお聖教がある。これが浄土真宗の大切な書である」と、吉崎で上人から習ひ受けたのである」と仰せになったのである。

夢の数々を書き記したことについてのわたしの思いはこうである。蓮如上人がこの世を去られたので、今はその一言の仰せも大切であると思われ。このように夢の中に現れて仰せになるお言葉も、ご存命のときと同じ尊い仰せであり、真実の仰せであると受けとめているので、これを書き記したのである。ここに記したことは本当に夢のお告げともいふべきものである。夢というのは概して妄想であるが、仏や菩薩の化身であるお方は、夢に姿をあらわして教え導くということがある。だからなおさらのこと、このような夢の中の尊いお言葉を書き記しておくのである。

『蓮如上人御一代記聞書』二百五十六